36　夏の夜は　まだ宵ながら　明けぬるを　雲のいづこに　月宿るらむ

清原深養父



月

〈声に出してよんでみよう〉

ナツノヨワ　マダヨイナガラ　アケヌルオ

クモノイズコニ　ツキヤドルラン

＊語頭以外のハ行の文字、つまり、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、**ワ行音**「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

＊ワ行オ段の「**を／ヲ**」は、古語では［wo］と発音し、助詞以外の一般の語にも用いられていました。11世紀初め頃、ア行オ段の「**お／オ**」が［o］から［wo］に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに17～18世紀頃、両者ともに［o］と発音されるようになり、現在に至っています。

＊「づ」は、「ズ」とよみます。「**ジ**」と「**ヂ**」、「**ズ**」と「**ヅ**」は、以前は違う発音だったのですが、16世紀頃から混同されるようになり、現在では高知や九州南部などの方言を除いて、違いはほとんどなくなっています。[2]

＊「**む**」は、「**ン**」とよみます。古くは、撥音の「ン」にあたるかなはなく（五十音図やいろは歌[3]にも「ん」の文字はありませんね）、「む」で代用したり、表記しなかったりしていました。

〈どんな意味だろう〉

夏の夜は、まだ宵の口なのにもう明けてしまったが、

（こんなに早く夜が明けるのでは、月も沈む暇がないだろう）
今頃、雲のどこに月は宿っているのだろうか。

＊「宵」は、日が暮れてからまだ間もない頃を言います。「ながら」は、並存しにくい２つの状態が並存していることを表し、逆接の意に解釈します。「ぬる」は、完了の助動詞です。「を」は、逆接の意の接続助詞です。
＊「らむ」は、現在推量（今頃･･･ているだろう）を表す助動詞です。

〈解説〉

＊夏の夜の短さを、こんなに短くては月も沈む暇がないだろう、きっと雲の中のどこかにいるに違いない、と、**機転**をきかせて詠んだ歌です。最初の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編集された和歌集）である**『古今和歌集』**（905 成立）の時代には、このように、**機知**に富んだ歌に人気がありました。

〈作者と出典〉

作者の清原深養父は、生没年も、経歴も未詳です。清原元輔（→「42 契りきな」）の祖父、**清少納言**（→「62夜をこめて」）の曽祖父で、2 人とも、この深養父の歌のように、機知に富んだ歌を得意としています。清少納言は、日本文学史上最初の**随筆**である『**枕草子**』の作者です。

深養父のこの歌の出典は、『古今和歌集』です。

---

1 ハ行の子音は、８世紀頃に [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて 11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。

2 「じ」は [ʒi]、「ず」は [zu] と発音します。これらは、現代も同じです。発音が変化したのは「ぢ」「づ」です。これらは、８世紀頃には [di]、[du] という発音だったので

すが、16世紀頃から、[dʒi]、[dzu] と発音されるようになり、やがて、[ʒi]、[zu] に変わっていった、と考えられています。この発音の変化は、「ち」「つ」の発音が [ti]、[tu] から [tʃi]、[tsu] に変化したのと並行するものですが、なぜこれらの変化が生じたのかはよく分かっていません。

[3] 「いろは歌」は、10世紀末から11世紀頃成立したと考えられているもので、当時使われていた かな 47文字を1度ずつ使って作られた、次のような歌です。

いろはにほへと　ちりぬるを　わかよたれそ　つねならむ

うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　ゑひもせす

現代では使われていない かな がありますね。「ゐ」はワ行イ段、「ゑ」はワ行エ段の音で、現代ではそれぞれ「イ」「エ」と読みます。また、当時は、清音と濁音の区別は表記上はありませんでした。濁点や漢字をあてはめて意味を示すと、次のようになります。

色は匂へど　散りぬるを　我が世誰ぞ　常ならむ

有為の奥山　今日越えて　浅き夢見じ　酔ひもせず

また、発音は次の通りです。

イロワニオエド　チリヌルオ　ワガヨタレゾ　ツネナラン

ウイノオクヤマ　キョーコエテ　アサキユメミジ　エイモセズ

内容は、仏教の経典から採られたものと言われ、現代語では大体次のようになります。

花の色は美しく輝いているが　花は散ってしまうのに

この世で一体何者が　常に変わらずにいられるだろうか（すべては無常である）

いろいろの因縁により生じるこの世を　今日生きて（しかしいつかは死んでゆく）

浅い夢を見たりはするまい　幻のようなこの世に酔ったりはしない

但し、ここで示した以上の解釈には、異説もあります。